湖山周辺の歴史的環境復元

【指導教員】　髙田　健一　　中原　　計

【学　　生】　上野　裕貴　　加納　　匠　　後藤　璃乃　　下野　夏海　　田部　芽以

九十九梨沙　　野田　未織

はじめに

鳥取大学湖山キャンパスがある鳥取市湖山町の濃山台地には、発掘調査などによって遺跡があることが知られている。普段生活している湖山周辺で人はいつから、またどのように生活してきたのかを明らかにするために、それらの遺跡を調査対象とし、湖山周辺の歴史的環境調査を行った。

１．調査対象・方法

⑴　調査対象

大学構内にある、湖山第１遺跡、湖山第２遺跡、三浦古墳・遺跡、大熊段古墳・遺跡の４つの遺跡を調査した。湖山第１遺跡は、鳥取市湖山町南１・４丁目に所在していた。ここは現在の大学のテニスコート付近である。湖山第２遺跡は、鳥取市湖山町の濃山台地南の崖下、海抜２～５mの平地に所在していた。ここは現在の付属小学校があるあたりである。三浦古墳及び三浦遺跡は農学部棟の南側、大熊段古墳及び大熊段遺跡は地域学部棟や共通教育棟の東側に所在する（図１）。

⑵　調査方法

調査方法は、文献調査、聞き取り調査、発掘調査の３つである。

①　文献調査

『湖山第１遺跡』や『湖山第２遺跡発掘調査報告書』、『三浦古墳』、『大熊段遺跡』などの発掘調査報告書を使用した。それ以外には、博物館の展示図録、論文、手記、地図なども参照した。また、過去の調査で出土した遺物の整理も行った。

②　聞き取り調査

大熊段１号墳には戦時中に掘られた塹壕の可能性のある溝などが残されている。その性格を調査するため、戦時中に湖山に来たことがある田中穣（87歳）さんと尾崎繁（87歳）さんの２名に聞き取り調査を行った。

田中さんは昭和７年５月14日に生まれ、鳥取第一中学校１年生で終戦を迎えた。戦後は鳥取大学農学部に進学、その後一般企業に就職された。尾崎さんは昭和７年９月18日に男４人女４人の兄弟姉妹の三男として生まれ、13年後の昭和20年、鳥取第二中学校１年生のときに終戦を迎えた。戦後は鳥取大学農学部に入学し、修了後に同学部に赴任、教鞭を執られた。

田中さんと尾崎さんの両者はともに湖山で軍事的な作業に従事した経験があり、そのことに関して田中さんには６月７日に鳥取大学構内で、尾崎さんには６月30日に鳥取市内でそれぞれ個別に聞き取りを行った。調査の際はICレコーダーで音声を録音し、後に文字に起こして記録した。また、調査対象としたのは太平洋戦争末期（昭

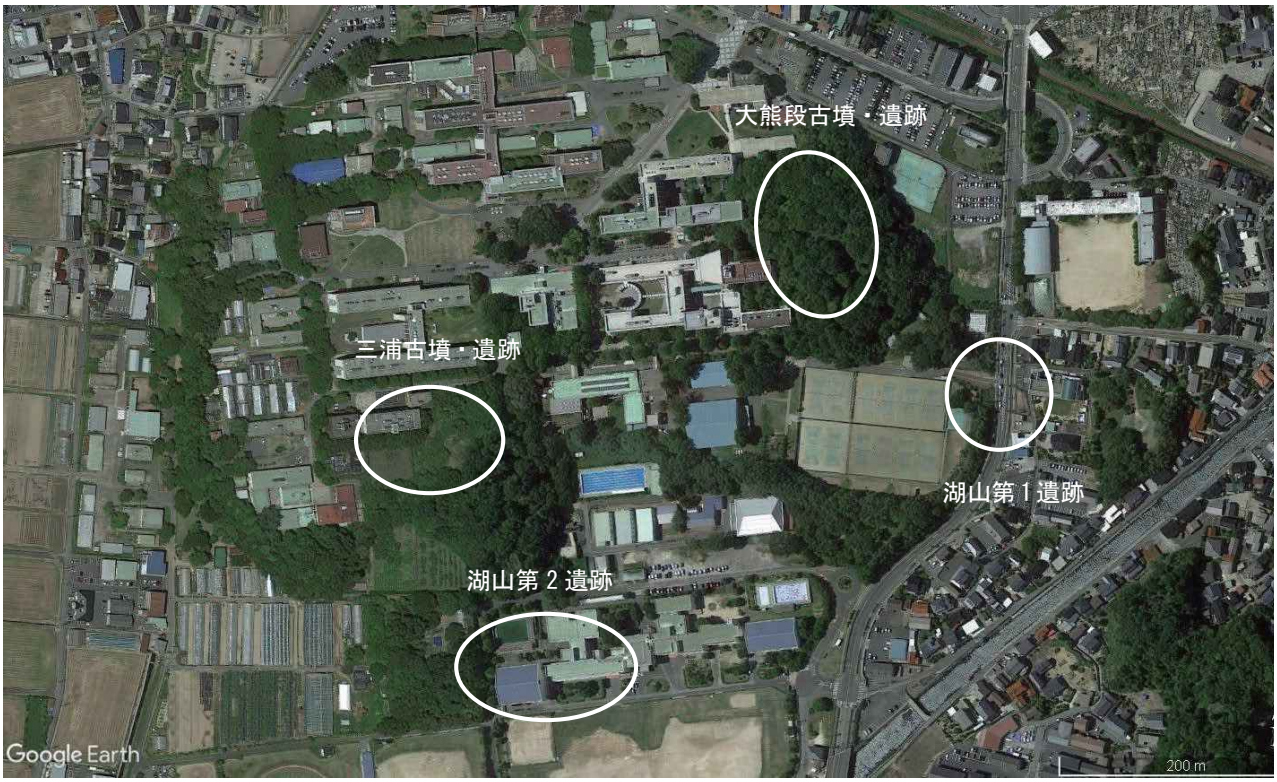

図１　湖山キャンパスの遺跡

和20年）である。

③　発掘調査

大熊段１号墳について、８月26日から９月12日の期間に発掘調査を行った。調査目的は墳丘規模、築造時期を確認すること、古墳上および周辺にあるくぼみが戦時中の痕跡であるかどうかについて調べることの二点である。作業は、調査地の草刈り、調査区設定、表土掘削、写真撮影、図面作成、埋め戻しという流れで行った。

調査地点は図２で示すように古墳の前方部裾部に設定し、円形のくぼみがその中に収まるように南北４m、東西５mのトレンチを設けた。また、くぼみがもし戦時中の痕跡であるならどのような形に掘られているのか調べるために、くぼみの中心を通る部分に幅50cmの土層観察用ベルトを設け調査を進めた。

表土掘削後、全体を地表下20～25cmまで掘削を行ったところ、西端から東側に１mまでの範囲で古墳の墳丘が確認できた。そこでベルトの北側に30cm幅のサブトレンチを設け、墳丘裾の確認を行った。

２．濃山台地とその周辺の利用の歴史

⑴　縄文時代

湖山第２遺跡からは、漁労で使われる網のおもりである石錘が縄文時代中期の土器とともに出土している（図３）。このことから、この遺跡付近で生活していた人々は、漁労活動に携わっていたことが推測される（財団法人鳥取県教育文化財団　1982）。また、旧海岸線も見つかっており、湖山第２遺跡があった場所は、当時水際であった。

⑵　弥生時代

湖山第２遺跡から、弥生時代前期の土器と土錘が出土している。弥生時代中期になると、遺物以外に竪穴住居跡が４棟検出され、後期のものも６棟ある（財団法人鳥取県教育文化財団　1982）。このことから、遅くとも弥生時代中期からは集落が営まれ、漁労活動を行っていたと考えられる。また、中期の竪穴住居から管玉の製作途中品が出土しており、玉作りも行っていた。

大熊段遺跡Ｇ区からは弥生時代後期の土器が出土している（鳥取大学　1985）。また、Ａ区の遺物整理により、太型蛤刃石斧の破片が確認された。これらのことから、大熊段遺跡周辺では弥生時代の遺構は見つかっていないが、弥生時代から人々の生活に利用されていた。

⑶　古墳時代

まず、集落については、湖山第１遺跡では、遺跡近くで古墳時代の貝塚が確認されている。また、調査地区内でシジミの貝殻が若干量と、漁労で使われる網の錘であ

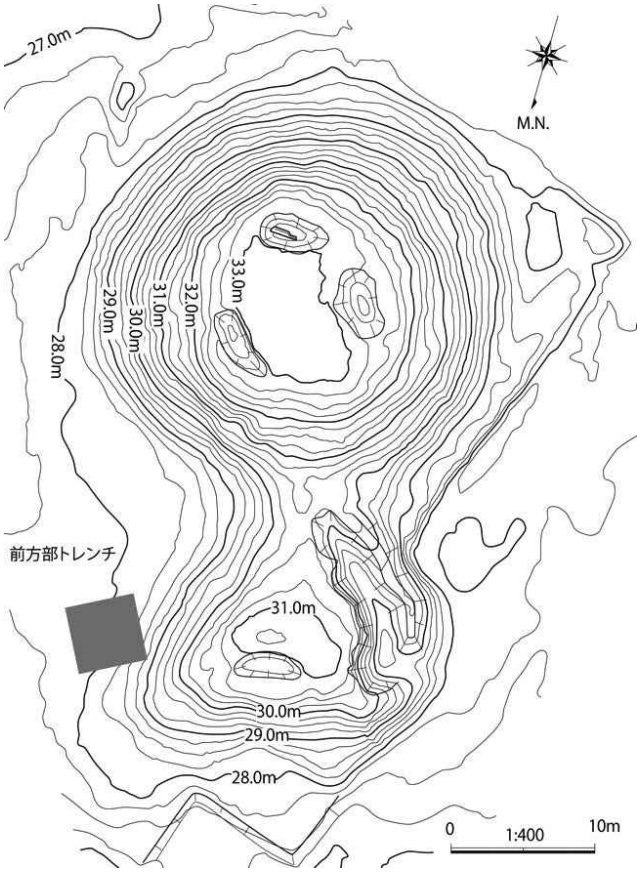

図２　大熊段１号墳実測図

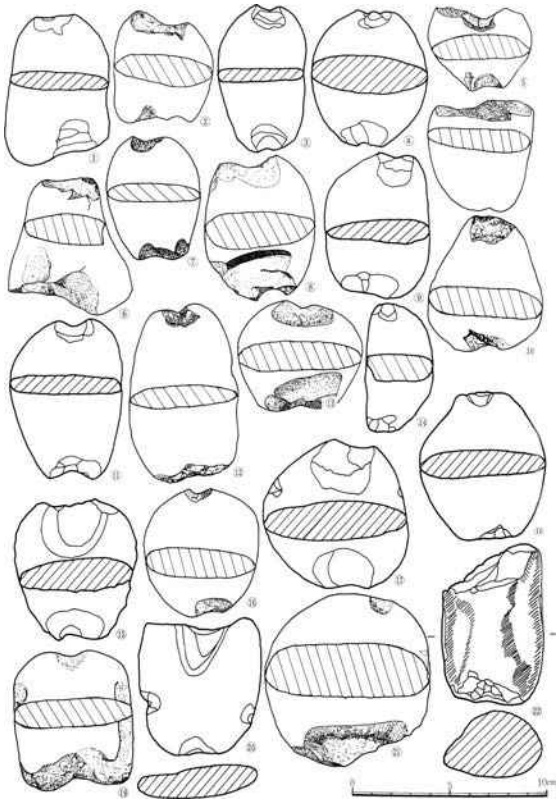

図３　湖山第２遺跡出土石錘

る土錘が出土した（鳥取県教育委員会・財団法人鳥取県教育文化財団　1989）。これらのことから、湖山第１遺跡付近では、湖山池を利用した漁労活動が盛んに行われていた。そして、鉄滓が竪穴住居内から出土し、かなり高温の熱を受けたと思われる焼土があったことから、簡単な鍛冶が行われていたと推測される。

湖山第２遺跡からは、古墳時代前期～中期までの住居跡が検出された（財団法人鳥取県教育文化財団　1982）。このことから、弥生時代の集落は古墳時代中期まで続いていた。古墳時代後期になると、遺構が検出されなくなることから、住んでいた人々の集団移住があったと推測される。また、遺物としては碧玉、緑色凝灰岩の管玉未製品、玉作関連遺物なども出土していることから、装飾品づくりが継続して行われていた。

次に、古墳については、元々、鳥取大学構内には多くの古墳があった（平勢・豊島　1986）。学部棟などを建設する際に、そのほとんどが調査されずに失われていった。当時の大学構内の古墳分布は図４に示す通りである。

三浦古墳には、１号墳と２号墳がある（鳥取大学・財団法人鳥取県教育文化財団　1982）。１号墳は全長36mの前方後円墳で、２号墳は直径23m、周溝含めると32mの円墳である。

三浦古墳からは、円筒埴輪やニワトリ形埴輪など形象埴輪が出土した（鳥取大学　1977、鳥取大学・財団法人鳥取県教育文化財団　1982）（図５・６）。

大熊段古墳についても、１号墳と２号墳がある。１号墳は、全長45mの前方後円墳で、２号墳は直径28mの円墳である。周辺の調査により、１号墳、２号墳ともに埴輪が伴うことが分かっている（豊島・平勢・久保・原田1989）。

図４　大学構内の古墳分布

大熊段１号墳について、これまで測量調査は行われているが、詳細な墳丘規模や築造時期が明確ではないため、発掘調査を行った。

墳丘規模については、地表面で確認できる墳丘裾よりも１mほど外側で、地表下70cmの部分に傾斜変換点（図７実線部）を確認した。この部分が墳丘裾であるとすると、これまで測量調査により推定されていた墳丘規模よりも全体に１mほど大きくなる。調査期間の関係上まだ一部でしか観察できていないため、今後さらに調査を行ったうえで判断する必要がある。

遺物については、今回の調査では、埴輪片が合計で325点出土し（図８）、それ以外に須恵器５点、土師器１点、中世土師器19点、その他22点の遺物が出土した。

埴輪片はサブトレンチ掘削中に特に多く見られ、これらは古墳に置かれていた円筒埴輪の破片であると考えられる。また出土した埴輪の形状に着目すると、分厚く焼成が良くないものと薄く焼成が硬く良いものの２種類に分けられる。分厚い埴輪は過去にも出土しており、薄い埴輪は今回の調査で初めて認識された。薄く硬い埴輪には突帯の突出度が高いという特徴があり、この特徴からは２つの解釈ができる。１つ目は大熊段１号墳が古墳時代中期までに遡る古い古墳であるというもの、２つ目は一見古そうな埴輪が後期まで残っているというものであ

図５　三浦古墳　円筒埴輪片

図６　三浦古墳　形象埴輪

る。今回の発掘調査では古墳時代後期の須恵器も出土しているため、２つ目の解釈が有力であると考えられる。また、２種類の埴輪が出土したことからは、当時の鳥取の埴輪づくりの様子が推察できる。埴輪づくりを専業とする人々は主に近畿地方など古墳が多い地域に集まり、古墳の少ない鳥取県には埴輪づくりに熟練した人は限られていたと考えられていた。今回の調査では、薄く焼成が良い埴輪が出土し、鳥取県にも埴輪づくりに熟練した職人が一部存在していたということが考えられる（鳥取大学地域学部考古学研究室　2020）。

図７　大熊段１号墳墳丘傾斜変換点

図８　大熊段１号墳2019年度調査出土埴輪

⑷　古代

奈良時代については、湖山第１遺跡からは土坑と土器が出土している。湖山第２遺跡からは５基の土壙墓と土器が出土している（治部田　1974）。平安時代については、湖山第１遺跡から掘立柱建物が１棟検出されている。

奈良時代～平安時代には、布勢、野坂、岩吉を含む地域に東大寺領の高庭荘という荘園があったとされている（鳥取県　1972）。しかし、湖山キャンパス内では、この時代の集落跡と呼べるほどの遺構や遺物は見つかっておらず、当時の土地利用はあまりよく分からないのが現状である。古墳時代にくらべると遺構や遺物が少なくなっているのは、湖山池南岸に山陰道が敷設されたことと関りがあるのかもしれない。

⑸　中世

湖山第１遺跡からは掘立柱建物跡が検出されたが、建物として復元できたのはわずかである（鳥取県教育委員会・財団法人鳥取県教育文化財団　1989）。湖山第２遺跡からは掘立柱建物や土坑が検出された（財団法人鳥取県教育文化財団　1982）。三浦遺跡からは中世墓群が検出された（財団法人鳥取県教育文化財団　1982、八峠2017）。

大熊段遺跡には、隣にある大熊段１号墳を意識したかのように中世墓群が位置している（財団法人鳥取県教育文化財団　1986）。Ｇ区の１～６号墓中、１号墓のみが火葬墓であることから、土葬墓主体の日本の葬制が中世においても存続していることが分かる。墓からは、銅銭、刀子、白磁の皿、土師質土器皿などが埋納品として出土した（図９）。銅銭は、６枚同時に発掘された。このことは、三途の川を渡るために六文銭が必要だったことに由来する。また、白磁の皿は、輸入品で、当時としては珍しい品物だった。

湖山キャンパス内の遺跡の中世の遺構・遺物はいずれ

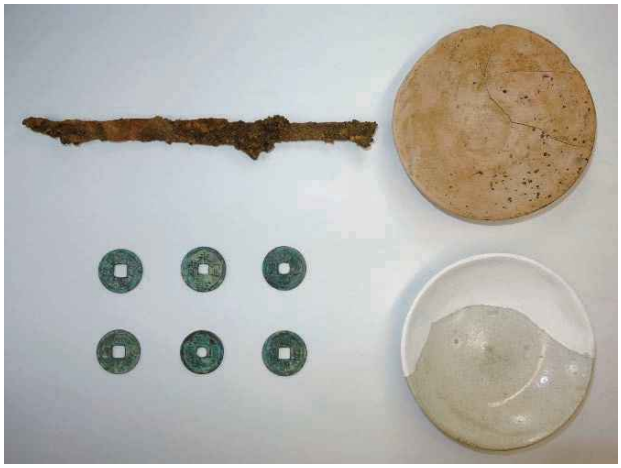

図９　大熊段遺跡４～６号墓出土遺物

も15世紀末～16世紀のものである。これはこの時期に700mほど南にある天神山城に守護所が置かれ、そこが政治の中心となったために、人が集まりにぎやかになり、濃山台地は主に墓域として利用され、中世墓群などがつくられたと考えられる。

⑹　近世

江戸時代には、『高草郡湖山邑田畑地続全図』によると湖山周辺の土地の一部が屋敷地や畑に利用されている（鳥取大学地域学部地域環境学科歴史環境班　2008）。しかし、湖山キャンパス内ではこの時代の遺構や遺物は見つかっておらず、当時の土地利用は不明である。

⑺　近現代

近代には、湖山周辺の主要産業として養蚕が盛んになる。昭和７年「鳥取北部」２万5000分の１地形図をみると、濃山台地も桑畑として利用されていることがうかがえる。

また、大熊段１号墳には、太平洋戦争中のものといわれる、「炮台」の痕跡や、塹壕の可能性のある造成溝が残っている（図10）。後円部墳頂平坦面の「炮台」設置跡は南、西、北東と３つあり、長さは４～５m程度、幅は２m程度である（図10上段）。前方部にも同規模の溝が一つ確認できる。前方部の西側には、墳丘を掘り込む形で溝が設けられている（図10左下）。古墳周辺に複数個所確認できる円形のくぼみ（図10右下）は、直径は２m程度で、蛸壺（一人用散兵壕）であった可能性が考えられた。しかし、これについては発掘調査により、穴として掘りこまれた様子ではないことから戦時中のものではなかった（鳥取大学地域学部考古学研究室　2020）。

周辺の大熊段遺跡からは松根油採取坑が検出されている。松根油採取坑からは、銅製懐中電灯や磁器片が出土している（鳥取大学　1985）。

戦後は、再び果樹園や畑として利用されていた。その後、1966年に鳥取大学が鳥取市立川町および吉方町から統合移転し、鳥取キャンパスとして現在に至っている。

３．太平洋戦争中の湖山について

濃山台地の利用の歴史については、通史的に概略を明らかにすることができた。ただ、いくつか解明できていない事柄も残されている。そのなかで、大熊段１号墳の「炮台設置跡」や「戦時中造成溝」と呼ばれている遺構に

図10　大熊段１号墳の「炮台設置跡」（左上・右上）、「戦時中造成溝」（左下）、円形のくぼみ（右下）

ついて、実際には何であるのか、また、「炮台」設置跡や塹壕であった場合、どのような理由でこれらが設けられたのか、より詳細に調査することにした。そこで、太平洋戦争中の湖山について文献調査と聞き取り調査を行った。

⑴　チ号演習について

①　チ号演習とは

戦時中に鳥取県内で塹壕などの陣地構築作業が行われたものとして、チ号演習がある。チ号演習とは、陸海軍の秘匿作戦の名称であり、「昭和19年７月24日捷号作戦準備に基づく沿岸骨幹築城作業作戦」のことで、戦況の悪化に伴い、敵の九州上陸に備えた陣地構築作業を指すものである。鳥取県では、勤労義勇隊による陣地構築作業がチ号演習と呼ばれている。本土決戦に備えて中国山脈の山腹を中心にコの字型狙撃陣地、一人用蛸壺、物資弾薬貯蔵庫など約560の横穴や壕が掘られた。

勤労義勇隊とは、国民義勇隊の編成に先立ち、捷号演習に特化した組織である。また、国民義勇隊とは、年齢15から60の男子、17から40の女子を一律に義勇兵役に服させ、本土決戦に際しては国民義勇戦闘隊となるものだった。

国民義勇隊は、捷号演習に特化した勤労義勇隊とは別であり、戦局の要請に応じて、防空・防衛・疎開・物資輸送・食糧増産に関する作業に従事していた。昭和20年３月政府において閣議決定した本土決戦のための国民総動員組織で空襲被害の復旧、陣地構築兵器弾薬糧秣の補給などを行っていた。しかしながら市民のなかには、国民義勇隊と勤労義勇隊を混同視する者も存在したようである。

勤労義勇隊の動員対象者は国民義勇隊と同じであり、動員期間は、４月下旬から６月までであった。作業手当として、男性２円、女性は１円50銭支給されることになっており、手当の請求根拠資料として名簿が作成された（西村　2017）。

②　鳥取県内における作業の記録

鳥取、倉吉、米子の三地区を中心に述べ５、60万人が総動員され、県内三地区に分割されていたものが、最終的に県内を６地区に区分して、動員本部がおかれた（表１・図11）。

・東地区

２地区に分かれており、一つは、鳥取(稲葉、中郷村)、岩美郡（倉田、米里、津ノ井を除く)、八頭郡全体、もう一つは、鳥取市（稲葉、中郷村を除く)、岩美郡（倉田、米里、津ノ井）の範囲である。作業内容は山に狙撃陣地、物資弾薬貯蔵庫のための穴掘り（久松山、百谷)、防空壕掘、佐谷峠の道づくりを行った。また、『横枕記』には、鳥取市横枕におけるチ号演習の記録が詳述されている（近藤　1952)。それによると、昭和20（1945）年５月14日から８月２日までの間に９回にわたって行われている。目的は、八丁山を中心に海岸から上陸してくる敵を迎撃する穴を土中に掘ることであった。終戦後はそれらを取り壊す命令が下り、破壊された。

表１「チ号演習」の地区別集合範囲と主な作業場所

地区	集合範囲	作業場所
東地区１	・鳥取市（稲葉、中郷村） ・岩美郡（倉田、米里、津ノ井を除く14ヶ町村） ・八頭郡全部	〔稲葉地区〕 山湯山、百谷、久松山
東地区２	・鳥取市（稲葉、中郷村を除く） ・岩美郡(倉田、米里、津ノ井村） ・気高郡全部	〔東郷地区〕 横枕、高路、今在家、北村、中村
中地区	・東伯郡全部	打吹山、四王子山、馬ノ山
西地区１	・米子市全部 ・西伯郡（成実、天津、大國、法勝寺、東長田、上長田村）	〔成実地区〕
西地区２	・日野郡全部 ・西伯郡（大幡、大高、幡郷、賀野、縣、尚徳、手間、五千石、春日、巌村）	〔大幡地区〕 越敷山、高塚山
西地区３	・西伯郡（汗入各町村及び日吉津、大和、弓濱各町村）	〔宇田川地区〕 宇田川山

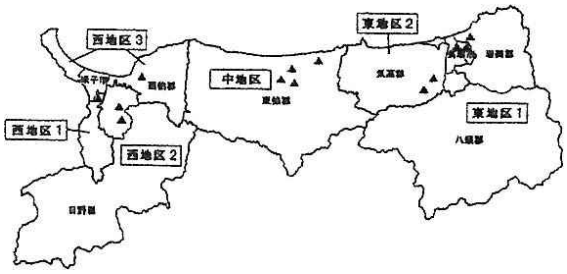

図11　チ号演習の動員地区区分図

・中地区

東伯郡全体が該当範囲であり、作業内容は、飛行場整備、坑道掘、塹壕掘、美保航空隊の製炭作業、迎撃陣地のための穴掘りを行っていた。

湯梨浜町宇野地区には、宇野村役場『チ号演習関係出面簿』が残されており、５月５日から８月11日にかけて４回行われ、打吹山や宇野、西郷、橋津で作業を行ったことが記載されている（西村　2017）。

・西地区

３つの地区に分かれており、１つは、米子市全部、西伯群（成実、天津、大國、法勝寺、東長田、上長田村）２つ目の範囲は、日野郡全域、西伯郡（大幡、大高、幡郷、賀野、縣、尚徳、手間、五千石、春日、巌村)、３

つ目の範囲は、西伯郡（汗入各町村及び日吉津、大和、弓濱各町村）である。作業は、スコップやツルハシで土石を掘りモッコで運ぶ重労働や海岸地帯の防風林をつくる作業をしていた。

また、つぼかめ山と越敷山に塹壕が掘られ、日野川沿いを進軍して敵を攻撃する予定であったとされており、越敷山に防衛本部を置き、軍隊と日野郡一円から動員された国民義勇隊による横山塹壕掘りが大々的に行われていた。宇田川山捷号演習では、大高村から20数名が参加し、他に岸本米子弓ヶ浜など分割された地区を跨いで動員されていた。現在、私有地とされている山に、チ号演習で掘られた約30mの塹壕が残されており、当時は宇田川平野を一望できる場所として、敵を迎え撃つための砲台だという話がされていたようである。しかし、途中で終戦を迎えたため達成率は鳥取３分の１、米子５分の１、倉吉８割に留まった（西村　2017、ふるさとの終戦秘話を語る会　2004）。

米子市越敷山古墳群では発掘調査が行われており、アジア・太平洋戦争末期の本土決戦に備えて作られた塹壕であると推測された溝が発掘されている（一般財団法人米子市文化財団　2018・図12）。

図12　越敷山古墳群　塹壕完掘状況

③　その他の活動について

チ号演習以外の活動では、軍馬や大八車が徴発、ヒマ栽培、飛行場建設のため突貫工事、松根油採取のための松根掘りなど行われた。ヒマ栽培は軍用航空機潤滑油の確保の国策から計画されたようだが、ヒマはアフリカインド原産であり栽培の成果は記録が見当たらなかった。飛行場建設については、倉吉の高城飛行場が本土決戦に備えて建設が進められた秘匿飛行場の一つであるようで、秘匿飛行場は、米軍の空襲を避けるために飛行場を秘匿するために急ピッチで建設が進められたものである。参加者の多くは年配者や主婦でブロック単位のチ号演習とは違い高城飛行場への動員は全県的に行われたようである。

松根掘りは終戦間際、松の根から抽出した油を航空機燃料の代替品として利用するため、女性や子供たちが動員されたチ号演習とともに強制された労働奉仕である。大熊段遺跡から検出された松根油採取跡は非常に深い掘り方であった。このことから、松根油を採取した太平洋戦争中は相当の苦労があったと考えられる（ふるさとの終戦秘話を語る会　2004）。

⑵　第二次世界大戦前後の湖山

聞き取り調査をするにあたり、当時の湖山の状況をよく知るため、当時の航空写真・地図を使用して湖山周辺を散策した。同様に文献調査も行い、当時の湖山の産業構造などを調査した。これらの調査で得られた情報は鳥取県内の産業の転換、湖山軍需工場の建設の経緯、湖山飛行場の利用についての３つに分けられる。ここではそれぞれ順にこれら３つの項目をまとめていく。

①　鳥取県内の産業の転換

明治時代以降、生糸産業は日本の外貨獲得の重要な産業となる。湖山でも蚕のえさである桑が砂丘の固定化につながることに目をつけた上山吉次の大々的な桑畑の造成の甲斐もあり、明治10年（1877）ごろから湖山は桑畑が増え始め、大正９年（1920）には現在の鳥取大学を含む湖山北部の大部分の土地が桑畑として利用された。彼の功績を記念した頌徳碑は今もなお湖山で見ることができる。この桑畑の拡大により生糸産業が湖山の地で重要な産業として確立していき、大正９年（1920）には日本製糸株式会社が湖山での操業に着手、生糸産業は最盛期を迎えていく（鳥取県　1969）。しかし、日本が大陸進出を画策するにつれて国際社会から非難を浴びるようになり、貿易規制を諸外国から受け始める。そして日中戦争・太平洋戦争によって貿易は完全に麻痺、生糸産業は打撃を受ける。それまでの価値を失った生糸産業用の土地は転用され、その一部は重工業用地として転用された。

②　湖山への軍需工場の建設

湖山の軍需工場としては日産輸送機株式会社湖山工場があり、現在では湖山公園、湖東中学校になっている場所である（図13）。この場所は元日本製糸株式会社鳥取工場であった。ここでは軍用機製造が行われており、主に軍用グライダーが製造された。

当時の日本は、本来の働き手である成人男性が戦地へ出兵されるなど慢性的な人手不足であったため、労働力を確保するべく、昭和13年（1938）に国家総動員法、翌年に国民徴用令が制定された。その影響により工場でも

図13　湖山周辺の軍事関連施設

徴用工や女子挺身隊、朝鮮半島出身者、中学生が工場での作業に従事していた（鳥取県立博物館　2015）。

鳥取県が発行する『孫や子に伝えたい戦争体験　下』の本文中の昭和14年（1939）に鳥取市に生まれ、幼児期を戦中の鳥取市で過ごした小川孝子さんの戦争体験から以下一部引用する。

〝鳥取は戦争の実被害も少なかった方だったと思うが、どの家にも防空壕はあったし、ときどきはB29も飛んできた。夜の警戒警報にそなえて、防空頭巾を枕元に置き毎晩のように服を着たまま寝た。母は松根掘りや海水を汲んで砂丘での塩づくりなどの勤労奉仕を経験した。〟

③　湖山飛行場の利用

昭和17年（1942）に福田軽飛行機会社が滑走路を設置し、同19年に日産輸送機株式会社が継承すると、戦時輸送機工場とともに陸軍航空機練習機飛行場となる。同20年（1945）に陸軍不時着飛行場として利用された（公益財団法人鳥取市文化財団ほか　2015）。現在の鳥取市湖山町北四丁目付近（今の国道９号線辺り）に存在していた（図13）。戦後の同32年７月には長さが2,000mほど延長され、市営鳥取飛行場として開場した後、同42年に現在の地に県営鳥取空港が開場される三年前の同39年に廃止された。

⑶　聞き取り調査の成果

①　田中さんへの聞き取り

田中さんへの聞き取りは、戦争末期にあたる昭和19年から20年、当時の生活の様子、湖山での作業内容、湖山の軍需工場、湖山の砲台の存在、について行った。

・当時の生活の様子

国民徴用令が出されたほか常時戒厳令が敷かれているような雰囲気で砲台等、軍の設備についての話は到底話せるような様子では無かった。また、当時の食糧事情は乏しいもので、お米も含め生活出需品は配給制が採られおり、吉方で野菜を作っていたおばあさんのところには、野菜を売って下さいと買いに来る人がいたという。学校では、松根油採取を行っていた。高学年（中学３、４年）は軍需工場に動員されたほか、特攻隊の志願の話があり、実際に親戚の方が志願されたそうで訓練に参加していたそうだ。実際に湖山にいた軍人はほとんどが在郷軍人ばかりだった。

・湖山での作業

田中さんはスコップを持参して家の近所（鳥取市街地）でトラックに乗り、湖山駅付近に集合させられたという。実際の作業内容は、飛行機を格納庫があった天神山（図13）から飛行場まで手で押して運ぶことや、飛行場周辺で穴を掘ることもあった。飛行機は、機体がベニヤ板よりも柔らかいもので、エンジンが付いていたものだった。また運搬の際、砂が舞って息が出来なかったそうだ。穴

掘りは、ほとんど砂地だったため、固いものは特になかった。これらの作業内容の目的は教えられず、少数の軍人同伴があったなか、学校の先生の指示で動いていた。

・湖山の軍需工場の存在

田中さん自身は全くご存じなかったらしく、グライダーの製造についてもご存じではなかった。湖山の「炮台」の存在についても聞かれたことはなく、仮に「炮台」があっても計画の遂行に関して疑問に残るそうだ。またチ号演習も全くご存じではなく、身内が知っていたとしても戦時の統制下により、口外出来なかった。

② 尾崎さんへの聞き取り

尾崎さんには松根油採取、当時の湖山の状況、そして湖山での軍事的な作業の主に３つの事柄をお聞きした。松根油採取は戦後末期には大々的に行われていたようで、尾崎さん自身も学校行事の一環として松根油採取を行った。尾崎さんによると鳥取市内にも丸山付近に松根油工場があり、松並町付近には松並木が存在していたという。当時の湖山の軍事施設を詳しくことを聞くことが出来なかったが、湖山飛行場で特攻隊の訓練が行われており、湖山の農家に特攻隊員らが分宿していたという話を伺うことが出来た。湖山での軍事的な作業は学校ごとに担当場所・内容が決まっており、尾崎さんは湖山西部の道路づくりと湖山飛行場に砂をまくという作業を行った。後者の作業は飛行場のカモフラージュではないかと尾崎さんは聞き取りの際に推測されていたが、当時は具体的な意味は知らされずに作業していた。なお、尾崎さんが独自に調べられた情報として鳥取高等農業学校（鳥取大学農学部の前身）では昭和18年に学徒動員の命令が下されていた。ただし出征で死亡した人の記録はないとのことである。

⑷ 小結

大熊段１号墳に残された戦時中のものとされる痕跡について、調査を行った。その結果、鳥取県内の戦時中の活動自体には様々な記録があったが、文献調査では湖山周辺で作業が行われていたという記録は見つからなかった。しかし、チ号演習の記録自体もほとんど残っておらず、記録として残されていない場所は他にもあった可能性は考えられる。特に、太平洋戦争時の湖山は、軍需工場や飛行場があり、鳥取県東部でも重要な場所であったことが分かった。

聞き取り調査からは、湖山飛行場などで作業が行われていたことは分かったが、濃山台地では作業が行われていたかどうかは不明であった。ただし、当時はどこで作業していたかは口外してはいけない状態であり、そのため、作業が行われていても知ることができなかった。

これらのことから、現状では、湖山地域で陣地構築作業が行われた可能性はあり、大熊段１号墳の痕跡がその名残であると考えることもできる。今後、当時から湖山周辺に住んでいた方などから聞き取りができれば、このことについて、明らかにできるかもしれない。

４．まとめ

湖山キャンパスのある濃山台地は、縄文時代の後半から現代にいたるまでのおよそ4000年にわたって断続的に利用されてきたことが分かった。

縄文時代半ばから、湖山池のほとりで漁労活動に携わる人々が生活をしはじめた。漁労活動は、弥生時代や古墳時代の人々もおこなっていた。弥生時代からは、集落と呼べる規模の遺構がみつかり、古墳時代中期まで続いたが、後期には集団移住があったと推測される。弥生時代や古墳時代には玉作りや鍛冶を行っていた痕跡もみられた。

古墳時代には、集落だけではなく古墳も数多く作られていたが、現代までにほとんどが破壊され、大熊段１号墳・２号墳、三浦１号墳のみが残存している。大熊段１号墳については、発掘調査により、前方墳の裾部と考えられる部分を確認でき、これまで考えられていた大きさよりも大きくなる可能性がある。出土した埴輪には、２つのタイプがあることが分かり、古墳の年代などが推察できた。

奈良時代や平安時代には、墓や建物跡がいくつか見つかっているが、遺構や遺物は多くなく、土地利用の実態はよくわからなかった。15世紀の終わりに南にある天神山城に守護所が置かれ、政治の中心となったため、中世墓群が作られた。近世には、ふたたび遺構や遺物が少なくなり、当時の土地利用の詳細は不明となる。

近代には、湖山周辺は養蚕業が盛んになり、濃山台地にも桑畑ができた。太平洋戦争中には、軍需工場や飛行場ができ、様々な活動の記録があり、当時の生活については詳細に知ることができた。しかし、濃山台地上でのチ号演習やその他の軍事的な作業が行われたという記録や証言は得られず、大熊段１号墳に残された痕跡はその可能性があるという確認にとどまった。

おわりに

夏に行った発掘調査では、ほとんどの日程が雨で蒸し暑くて大変だったが、思ったより遺物が発掘できて楽しかった。土器片や埴輪片が大量に出てきたことが印象的だった。本当に出てくるものなのだと驚いた。来年も引き続き行われる発掘調査では晴れることを願っている。

大熊段古墳や三浦古墳に限らず湖山キャンパス構内に残る古墳や遺跡は人々に忘れられないように伝えていけたらいいと考える。

謝辞

地域調査プロジェクトにあたっては、以下の方々にご協力いただきました。記して感謝申し上げます。

岡村吉彦、尾崎繁、田中穣、西村芳将、鳥取県立公文書館県史編さん室（敬称略）

参考文献・図版引用文献

一般財団法人米子市文化財団　2018『一般財団法人米子市文化財団埋蔵文化財発掘調査報告書14鳥取県西伯郡伯耆町　金廻芦谷平遺跡・越敷山古墳群（金廻地区）』

近藤時太郎　1952『横枕記』

財団法人鳥取県教育文化財団　1982『湖山第２遺跡発掘調査報告書』

財団法人鳥取県教育文化財団　1986『大熊段遺跡』

治部田史郎　1974「三浦団地遺跡について」『郷土と博物館』第19巻第２号　鳥取県立博物館

鳥取県　1969『鳥取県史』近代第１～３巻

鳥取県　1972『鳥取県史』第１巻　原始古代

鳥取県立博物館編　2015『「戦後70年　鳥取と戦争」図録』

鳥取県教育委員会・財団法人鳥取県教育文化財団　1989『湖山第１遺跡』

鳥取市歴史博物館編　2015『70年目の夏　昭和の戦争と鳥取』

鳥取大学　1985『大熊段遺跡Ｇ区発掘調査報告書』

鳥取大学　1977『三浦古墳』

鳥取大学・財団法人鳥取県教育文化財団　1982『三浦遺跡』

鳥取大学地域学部考古学研究室　2020『大熊段１号墳―第１次発掘調査の概要―』

鳥取大学地域学部地域環境学科歴史環境班　2008「湖山の歴史」『平成20年度地域環境調査実習報告書』

豊島吉則・平勢隆郎・久保穣二朗・原田雅弘　1989「鳥取大学構内出土の遺物」『鳥取大学教育学部研究報告』（人文・社会科学）第40巻第２号　鳥取大学教育学部

西村芳将　2017「本土決戦と「チ号演習」、勤労義勇隊、国民義勇隊」『鳥取地域史研究』第19号　鳥取地域史研究会

平勢隆郎・豊島吉則　1986「濃山古墳群」とその環境―航空写真による鳥取大学構内古墳群の予察的研究―『鳥取大学教育学部研究報告』（人文・社会科学）第37巻第１号　鳥取大学教育学部

ふるさとの終戦秘話を語る会　2004『子と孫に伝えたいふるさとの終戦秘話』

八峠興　2017「鳥取・湖山池周辺の中世墓群について（下）―桂見・西桂見・湖山地域ほか―」『鳥取地域史研究』第19号　鳥取地域史研究会

「Google Earth」（最終閲覧日2019年10月11日）https://www.google.co.jp/intl/ja/earth/

国土地理院「地図・空中写真閲覧サービス」

（1947年米軍航空写真　最終閲覧日2019年10月11日）

（明治30年「鳥取北部」25万分の１地形図

最終閲覧日2019年10月11日）https://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do#1

国史大辞典「高庭荘」JapanKnowledge, https://japanknowledge.com/（参照2020年５月１日）